吉田松陰は「征韓論」の原型か

要　旨

社会システム研究科東アジア専攻

久保伸子（2011M50001）

日本人にとって吉田松陰といえば、一般的に「松下村塾」で明治維新の志士らを育てた教育者のイメージが極めて大きい。特に地元である山口県（長州）では、松陰を語るとき「松陰“先生”」と呼ぶほどである。かたや韓国では一般的に、朝鮮侵略論を唱え、明治政府において対朝鮮政策を進めた木戸孝允や伊藤博文らの師である「征韓論者」として認識されている。日韓（朝）関係史研究においては、「征韓論の原型」ともいわれる。

日韓の歴史認識の相違は、日韓会談の場などで常に問題とされるところである。本稿は、歴史認識の相違の一つとして、日本における一般的な松陰像と韓国および日韓（朝）関係史研究における松陰像との乖離が生じた理由を検証することで、それぞれの歴史認識の背景を理解し、時に批判を行うものである。

本論の構成は３章立てとした。第１章では、日韓（朝）関係史研究において征韓論の原型ともいわれる松陰の対外観・雄略論（侵略論）、松陰の思想を、松陰の行動、著作により検証した。

第２章では、日朝（韓）関係史を概観するとともに、松陰ほか当時の日本人の多くが史実とし、朝鮮観のベースともなっていた『古事記』『日本書紀』の神功皇后伝説とその変遷をたどり、日本人がその伝説がどのように利用し、また影響を受けてきたかを検証した。

第３章では、松陰像が時代によっていかに変遷し、またどのように利用されたかをたどり、一般的な日本での松陰像と日朝（韓）関係史研究や韓国における松陰像との違いが生じた過程を検証した。

韓国や一部日韓（朝）関係史研究においては、松陰の雄略論（侵略論）の征韓思想と侵略性が強調され、日本の一般的な松陰像では雄略論（侵略論）自体が欠落する。このような積み重ねが日韓の歴史認識の乖離を生む。そして互いに相手の認識を理解しようとしない限り、その相違は埋まることはない。